

■地域を担う「裏方」と「協働」の実践・研究 ～ゼミ「とちお祭への裏方参画と調査・情報発信」～

澤井 芳秀（長岡大学経済経営学部今瀬政司ゼミナール4年生）

今瀬 政司（推薦：長岡大学経済経営学部 准教授）

Keyword 地域活性化、裏方、協働、実践研究

[目次]

第1部 とちお祭の裏方と協働の調査研究報告 ……	p.1
(1)調査研究の背景・目的と方法……………	p.1
(2)調査研究の結果……………	p.1
第2部 とちお祭の裏方と協働の実践活動と調査……	p.3
(1)祭の準備活動と調査……………	p.3
(2)祭の「裏方」活動と調査……………	p.4
(3)祭の「表方」活動と調査……………	p.5
(4)祭の「協働」によるPR活動と調査……………	p.7

第1部 とちお祭の裏方と協働の調査研究報告

(1)調査研究の背景・目的と方法

① 背景・目的

新潟県長岡市栃尾地域（旧栃尾市）は過疎化が進む地域である。過疎化の現状を改善していく為には、どのような方法があるのか考える。

栃尾地域において、「とちお祭」への参画と協働という実践的な活動と調査研究を通して、栃尾地域の観光・文化面をアピールし、地域の活性化に貢献することを目的とする。

②調査研究方法

長岡大学の今瀬政司ゼミナールでは、長岡市栃尾地域で毎年開催される「とちお祭」において、一般的な参加方法である「表方」と、祭を運営するスタッフである「裏方」の両方の実践活動を行った。また、それらの活動と並行して、取材・調査、記録を行い、祭から分かる栃尾地域の実態について把握した。

「表方」の活動・調査としては、とちお祭の各種イベントに出場者として取り組んだ。「裏方」の活動・調査と

しては、とちお祭開催に向けての事前PR活動、祭の事前準備と前日準備、祭当日の運営、祭の片づけや振り返り等に取り組んだ。さらに、今瀬ゼミと地域の住民団体・行政等の「協働」事業として、「とちお祭」のイベント出前開催や巡回パネル展といったPR活動を行った。詳しくは、第2部において報告する。

(2)調査研究の結果

①とちお祭の歴史

とちお祭は、毎年、年に一度行われ、祭り事の多い栃尾の中でも地域を代表する祭りの一つである。とちお祭の歴史は古く、第1回目が行われた1955年は、「繊維まつり」という名前で開催していた。この頃は栃尾の繊維業界が中心となって開催しており、織物求評展示会なども行われていた。栃尾観光協会が1980年に発足し、その翌年に繊維まつりが当時の「うま市」と統合され、名称を現在の「とちお祭」とした。

1956年の第2回繊維まつりでは、仁和賀行進が「仁和賀行列」という名称で初開催され、第11回目の繊維まつりが開催された1965年、この年に第1回目の「樽みこし綱引き大会」が開催された。

「とちお祭」という名前に変わって以降も、多くのイベントは引き継がれており、祭りを代表する「仁和賀行進」や「全日本樽みこし綱引き選手権大会」などが、古い歴史を持っていることがわかる。「仁和賀行進」は、各地区・各団体が、パフォーマンスをしながら街中を練り歩くというイベントで、「全日本樽みこし綱引き選手権大会」は、酒樽を積んだみこしを綱引きするというイベントで、どちらも特徴的である。また、その他にも花火師しかできない筒設置や、点火等以外すべて住民が手作りでを行い、山の山頂で打ち上げる「大花火大会」がある。花火の打ち上げに関しても、打ち上げ場所の変更がありつつも、古くから開催されている。

②とちお祭への裏方参画から浮かび上がった実態

とちお祭を開催するにあたり、早くからの準備段階ではそれぞれのイベントの「部会」が開催される。部会とは、各イベントの参加団体の代表者を集め、イベントについての話し合いを行うミーティングのことである。中でもとちお祭のイベントの一つ「仁和賀行進」に関する話し合いが行われる仁和賀部会は、過疎化が進む栃尾地域の現状を表したような状況が見られた。

部会は、参加者数が十数名ほどと少なかった。仁和賀行進は、栃尾地域の過疎化に伴い、参加団体数も年々減少してきており、最盛期には15団体であったのに対し、2014年度第60回のとちお祭での参加団体数は事前登録が8団体しかなかった。そのため、部会参加者の中から「来年は仁和賀行進をやめて、それに代わるイベントを新たに検討すべきではないか」といった意見も出ていた。

2015年度第61回のとちお祭でも仁和賀行進は行われたが、やはり「参加人数が少ないという現状に合わせて新しいイベントに変える必要があるのではないか」といった意見も出ており、第62回とちお祭においては、仁和賀行進をやらず、新しいイベントを行うということに決まった。

「大花火大会」の準備活動でも過疎化のあおりを受けた現状がみてとれる。大花火大会の準備活動は年配の方達のみで行っており、若い人の顔は見受けられなかった。栃尾煙火協会の方への取材では、「点火合図を出す跡継ぎが見つからないという問題がある」といった悩みも聞かれた。とちお祭の準備活動全体を通して見ても、「裏方」での活動に関わる若い人材のマンパワー不足という現状があった。

③今後の「とちお祭」への提言

今瀬ゼミでは、こうした「とちお祭への裏方参画と調査・情報発信」の現場での活動を通して、「とちお祭」への3つの提言を行った。

1つ目は、「とちお祭」の裏方さんが、地元で再評価されるような仕掛けをし、地元の裏方さんが増えるようにすることである。(注 p.26)

これまで上げてきたような活動を通し、我々ゼミ生ができるのはあくまで地域活性化のお手伝いをして、「とちお祭の裏方さんはこういうことをしている」という所を伝え、関心を持っていただく所までで、地域の人自身がそれをどのように受け取り、どうアクションに移すかという部分が重要になってくる。地域の人、特に若年層

の活躍が求められている。

2つ目は、とちお祭の「全日本樽みこし綱引き選手権大会」を、栃尾以外の地域の祭において「出前開催」し、樽みこし綱引きの魅力を多くの人に知ってもらうことである。(注 p.26)

ゼミ生自身も実際に参加させていただいてわかったように、実際に体験してみないとわからないことは多い。樽みこし綱引きの面白さをより多くの人に知ってもらうことで、参加者も増え、とちお祭がよりにぎやかになるであろう。

3つ目は、とちお祭の会場で地元の名物料理や家庭料理の屋台を多く出すようにして、域外からの来場者の楽しみを増やすことである。(注 p.26)

とちお祭では、「味のテント村」として屋台が並ぶ。しかし、そこで販売されているものはたこ焼きや、焼きそばなどの一般的な屋台で食べられるものである。栃尾地域には名物の「あぶらげ」などおいしい食べ物が多くある。そういったものを屋台で並べることで来客者の注目や関心を集めることができるのではないかと。

④祭における「裏方」のあり方の提言

ゼミの活動・調査による主な成果として、1つはゼミが「裏方」に参画して、報告書やパネル展等で「裏方」がどういった作業を行うものなのかを発表することで、祭を陰で支える「裏方」の重要性に地域の人々の関心が高まるきっかけを作ることができたことである。過疎化により祭では参加団体が減少し継続が危ぶまれるイベントがあるが、祭の運営が市役所と栃尾観光協会に任せられ、今瀬ゼミの様な有志で「裏方」を担う地域の人が殆どいないことも課題として浮かび上がった。

地域の人が「裏方」にも興味を示し積極的に関わることになる事が重要で、「裏方」を生み出す仕掛け作りに焦点を置く必要がある。なぜ地域の人々が祭の「裏方」に関心を持つ必要があるのか、それは「地域の人々の力で行事を存続させていくため」である。

今回の活動・調査のように、地域外の人物である我々が地域に足を踏み入れ、地域の活性化の為に活動するという例は他の地域でも見受けられることができる。そういった活動が連続性を持ち、半永久的に関わり続けるならばよいが、ある程度の活動成果を残した後、関わりが少なくなるということが多くであろう。勿論、半永久的に関わる事がベストであるという事ではない。地域の人々と関わっていくに際して、どういった活動をしていくかということが重要なのである。地域外の人物による介入が

あるときに活発になったとしても、地域外の人物による介入がなくなってしまった段階で元の状況に戻ってしまっ
ては意味がないのである。活動を通して如何に地域の人々が自分の住んでいる地域での活動に興味、関心を持ち、行動に移してもらおうのかという点が重要なのである。また、とちお祭のイベントの一つの「大花火大会」では、高齢化や過疎化により後継者が見つからないという問題がある。

地域の人々が、自分の住んでいる地域での活動に興味を持つという事は、そういった状況を改善できる可能性もはらんでいる。今回の活動では地元の人々ですらあまり知られていない「裏方」としての作業を自ら体験し、それらを多くの場で発表させていただいた。こういった活動が地域の人々に「裏方」としての作業に関心を持ち、「自分もやってみよう」という行動を起こすきっかけとなるのではないだろうか。地域を活性化するために地域に密着するだけでなく、地域に勢いをつけ、地域自身が盛り上げていけるような潤滑油となることが、地域を活性化するには重要なことであろう。

⑤祭における「協働」事業のあり方の提言

ゼミの活動・調査による主な成果として、もう1つは今瀬ゼミと地域の人々との「協働」の関係が築かれて、新たな協働事業の企画が生まれたことである。長岡大学の学園祭「悠久祭」において、仁和賀行進を「出前開催」したり、活動・調査結果をまとめたパネルの「長岡市内巡回パネル展」を開催したりした。

一言で「協働の関係を築く」といってもこれは簡単な事ではない。今回の例で言えば、地域の人々が我々を受け入れてもらえるのか、お互いに必要性を感じ、信頼を合えるのかという点である。また、地域の方々としても我々今瀬ゼミにどこまで期待してもいいのか、することができるのかという点が明確にならなければ、良い関わり合いとは言えなくなってしまう。

こういった課題は栃尾地域に限らず、地域を活性化させるために、今まで踏み込んでこなかった地域に足を踏み入れる際、考慮する必要がある。「協働」の関係を築くには長い期間の関わりが必要であり、初めて地域に関わる際に印象が悪いとその後の関係に支障をきたす可能性があるからである。

今回の活動を通して、「協働」の関係は、実績と信頼を積み重ね、互いの必要性が出てくることで自然と出来上がるものであることが実証的に明らかになった。

第2部 とちお祭の裏方と協働の実践活動と調査

今瀬ゼミでは、2014年度第60回と2015年度第61回のとちお祭において「裏方」「表方」活動と調査を行ったが、ここでは主に第60回での取組みを中心に報告する。

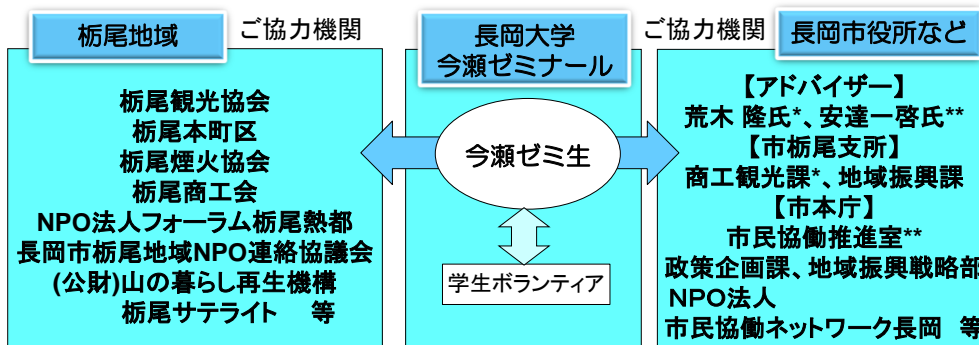
(1)祭の準備活動と調査

①とちお祭開催の事前PR活動

とちお祭の事前告知のPRイベントが「シティホールプラザ アオーレ長岡」(長岡駅前の長岡市役所本庁舎)で開催された。(注 p.17)

PRイベントは、栃尾の幼稚園児などが、とちお祭で行う演奏発表を行うもので、来場者に対してゼミ生は約200枚ものチラシを配布した。アオーレ長岡ではとちお祭のパネル展も同時開催され、歴代のとちお祭のポスターや年代ごとにとちお祭の様子を写した写真をパネルにしたものが飾られた。ゼミ生はその設置作業も行った。

アオーレ長岡で事前PR活動を行ったのは、長岡の中心街からの来客者を増やしたいという狙いがあったことであつたが、イベントの来場者は子供たちの演奏を見るためにいらしゃった栃尾地域の方々が多く、既にとちお祭を知っている人たちが殆どであった。



②とちお祭の事前準備および前日準備

祭りの3週間程前、とちお祭の開催に向けて、会場周辺で様々な事前準備の作業が行われた。ゼミ生の主な作業内容は、備品倉庫（大野倉庫）から祭りののぼりや提灯、ロープ等をトラックに積み込んで運搬。のぼりを組み立てて、各所に設置。道路端で提灯をくくりつけるためのロープの取り付け、その取り付けで邪魔になってしまう木の枝の剪定、剪定で落ちた葉や枝の回収、そして、提灯の設置であった。（注 p.17）

なお、備品倉庫は祭りの関係者ではないと入れない場所で、倉庫からの運搬作業は貴重な経験である。

「とちお祭」の前日準備では、メイン会場のステージの掃き掃除、「全日本樽みこし綱引き選手権大会」競技場の雨よけのためのブルーシートがけ、テントや椅子など祭りで使う様々な備品の運搬、大民踊流しとみこし渡御の演奏ステージの設営や提灯付け等が行われた。

③花火の打上げ会場の前日準備

花火打上げの前日準備は、打上げ場となる山頂での作業がメインとなる。打上げに必要な発電機、防火用噴霧器を山に運ぶ作業、山頂には枯葉が多くあるため、花火の燃えカスによって山火事が起こらないように枯葉をまとめてシートをかぶせる作業、打上げ合図を出す際に使うテントを設置する作業、防火用の簡易プール組み立て、山の麓から水を運び入れ、といった諸作業を、栃尾煙火協会のスタッフに協力する形で今瀬ゼミが一緒に行った。打上げ前日には、花火を打ち上げるために使う単管はすでに設置され、当日は雨の可能性があったため、単管には洗面器のような雨よけが付けられていた。栃尾煙火協会の高見氏によると、花火の打ち上げ会場となる山の土地は、地主の方のご好意で借りて使わせてもらっているもので、準備や後片付けは念入りに行わなければいけないという。

(2)祭の「裏方」活動と調査

①とちお祭当日の運営（1日目）

とちお祭は2日間に渡って開催される。2014年度第60回とちお祭は8月23日（土）に1日目が開催された。祭りスタッフがメイン会場の秋葉公園に朝8時に集合して、全体打合せが行われた後、会場整備や運営の作業に入った。今瀬ゼミはボランティア学生を含めメンバー10名が集まり、8時の全体打合せに合流した。（注 p.19）

ゼミ生およびボランティア学生は裏方の作業として、「全日本樽みこし綱引き選手権大会」の競技場に雨予防としてかけられていたブルーシートを撤去し、スポンジ

を使って雨で濡れた競技場から水分を取り除き、整地するためにレーキがけを行った。また、屋台である「味のテント村」が開催できるよう、テントの設置や椅子、机の運搬作業、子供が楽しめるようなアトラクションコーナーの準備も行った。

10時からとちお祭のオープニングイベントが始まり、正午からは、「全日本少年少女樽みこし綱引き選手権大会」の受付が開始され、13時から15時過ぎまで行われた。（注 p.20）

「全日本樽みこし綱引き選手権大会」は2日間で対象となる部門が異なり、1日目は少年少女の部門で小学生以下が参加し、2日目はチャレンジシップとチャンピオンシップが行われ、主に大人が参加する部門である。

今瀬ゼミは一部学生が当日の取材・調査、記録を行う傍ら、前日に引き続き花火打上げ場所における作業も行った。前日から新たに増えた作業は、テント付近の照明設置、山に登る道路にはみ出した枝の撤去、「立入禁止」と書かれた看板の設置である。

夜になると中心市街地（商店街）で行われる「大民踊流し」と「みこし渡御」の準備に移る。祭りのスタッフは、17時に「とちパル」（栃尾秋葉門前商工プラザ）の3階にある控え室にて、持ち場確認、作業内容確認を行い、18時前には大民踊流しとみこし渡御の会場の担当場所についた。「大民踊流し」は、18時半に受付を開始し、18時45分には参加団体が踊りの開始位置に整列完了するよう誘導した。そして、19時から栃尾観光協会会長や長岡市長の挨拶の後、大民踊流しがスタートした。第60回とちお祭では30以上の団体が参加した。ゼミ生はルート折り返し地点でサイリウムを用いて参加者誘導を行い、20時半に大民踊流しが終了すると同時に、祭りのスタッフは、各参加団体のプラカードを回収し、本部の片付けや道路の清掃、交通整理・誘導を行い（みこし渡御終了迄）、22時前には後片付け、清掃、通行止め看板・マセ等を回収した。

一方、「みこし渡御」は、大民踊流しスタート時の19時から受付を開始した。渡御の参加には一人千円を支払う必要がある。ゼミ生は参加費を受け取り、参加団体名を確認する作業を行った。仮設トイレの水補給も行った。参加団体には、栃尾内外の団体もあった。20時になると決められた場所に移動・準備をして、20時半の大民踊流し終了と同時に、同じ場所で渡御がスタートし、22時15分にみこし渡御が終了した。みこし渡御終了後には直会の準備手伝いとして、ブルーシートを張り、栃尾名物である「あぶらげ」の乗った皿を運んだ。1日目の活動内容

は以上のようなものであった。

②とちお祭当日の運営（2日目）

8月24日（日）、「とちお祭」2日目は、午前中に「全日本樽みこし綱引き選手権大会」、午後に「仁和賀行進」、夜に「大花火大会」が行われた。

2日目の「裏方」活動は夜がメインであったため、「表方」活動の部分については後述する。

「仁和賀行進」終了後、「大花火大会」の観覧会場となる小学校での作業に移った。作業内容は、テント、机、椅子、音響設備の設置などであった。道路侵入禁止標識も会場周辺に移動して設置し直した。17時半になると、花火打上げで場所提供等お世話になっている丸五食堂において、大花火大会の打ち合わせを行った。山頂の花火打上げ場所は、非常に危険なため、ヘルメットの着用が必須である。山頂にあがったのは、ゼミ担当教員の今瀬先生とゼミ生2名であった。

18時過ぎから、スタッフはそれぞれの持ち場に移動して配置についた。ゼミ生およびボランティア学生もそれぞれの配置についた。花火打上げの前には、打上げの合図を出す際に使うラジオや、懐中電灯の電池があるか最終確認を行う。その際、電池切れを起こしていたため、山頂の2箇所にある花火の打上げ場所を2回程ゼミ生が往復した。往復の際、花火の配線が地面の至る所に伸びており、線を踏むなどして配線が切れてしまうと花火が打ち上がらなくなる為、細心の注意が必要であった。

花火打上げ場所では、準備段階で立てておいたテントの中に入り、栃尾煙火協会のスタッフと今瀬先生が、花火の番付表を見ながら、花火師が花火に点火するための合図を送った。打ち上げる花火ごとに、名称や寄附者名などを会場本部（山の麓の市街地の見学側）にいるアナウンサーがマイクで読み上げる。その様子がラジオ放送（FMながおか）で流される。それを聞きながら、秒単位でちょうどどのタイミングを見計らって点火の合図を行うのである。19時半になると花火の打上げが始まった。花火の番付に従って、栃尾煙火協会のスタッフが、「何番、何々、点火」と言って花火師に指示を出し、打ち上げていった。（注 p.26）

テントから単管までの距離は、近いものでは10m程度しか離れていない。テントからは、花火がごう音と共に上がっていき、頭の真上で開く花火を見ることが出来たが、打ち上げられた花火の燃えカスが雨のように降ってくるため、非常に緊張感が漂うなかでの打ち上げであった。

21時には全ての花火の打ち上げが終わり、花火師たちが花火の筒を撤収した後、大きな燃え殻だけを拾い集め、先に下山していった。花火の打上げから筒の撤収などの作業までは、花火師のみが行う。

花火師が撤収を終わり、打上げ場所を後にして帰っていったのを確認してから、栃尾煙火協会のスタッフと今瀬ゼミはテントから外に出て、防火水槽の水を抜き、22時半頃に下山した。大花火大会の終了後は、花火会場近くの食堂（丸五食堂）で祭りの打上げの懇親会へ参加した。その後、23時半頃には抜けさせて頂き、2日目の日程が終了した。

③とちお祭の片付け

8月25日（月）の「とちお祭」翌日、祭りのスタッフは当日にやり残した片付け作業を行った。今瀬ゼミも9時から、祭り会場全体と山頂の花火打上げ場所に分かれて片付け作業を行った。祭り会場全体の片付けでは、「オープニングイベント」「全日本樽みこし綱引き選手権大会」等があったメイン会場（秋葉公園）や、栃尾観光協会のある「道の駅」において、主にテントの骨組みなどの回収・運搬や雨で濡れた提灯などを乾かす作業を行った。

テントはすぐに回収できるように各骨組みに結んであったが、それらをきちんと結び直し、2台のトラックの荷台に積んで祭りの備品倉庫（秋葉公園から大野倉庫までは車で5分程の距離）まで運んだ。それを流れ作業のように行い、倉庫を何度か行き来した。雨で濡れた物を乾かす作業では、提灯は紐でつなげてカーテンのようにぶら下げて乾かした。また、屋根と骨組みが一体の簡易タープを建てて、水分を落としていった。乾いたテントから次々と片付けていった。（注 p.24）

一方、山頂の花火打上げ場所の片付けでは、花火打上げの際に散らばった花火の玉の殻や燃えカス、花火の単管に被せられていた銀紙を拾う作業、テントをたたむ作業、水を抜いておいた防火水槽をたたむ作業を行った。花火の燃えカスなどは、広範囲にわたって非常に沢山落ちていたが、見落とすわけにはいかなかったため、非常に骨がおれる作業であった。

(3)祭の「表方」活動と調査

とちお祭の「表方」としても、様々な活動に参加させて頂くと共に調査を行った。「表方」活動としては、「仁和賀行進」と「全日本樽みこし綱引き選手権大会」の2つに出場者として参加した。仁和賀行進に関しては、最

初はどういったものなのかもよくわかっていなかったが、栃尾の本町区（自治会）の方々との関わりをとおして、理解を深めた。

①とちお祭2日目の表方活動①

～全日本樽みこし綱引き選手権大会～

前述の通り、とちお祭2日目の日中は「表方」活動がメインであった。2日目は午前中に「全日本樽みこし綱引き選手権大会」に参加し、午後からは「仁和賀行進」に参加した。

「全日本樽みこし綱引き選手権大会」の大人部門には、チャレンジシップとチャンピオンシップの二つがある。チャレンジシップは、初心者向けの部門であり、チャンピオンシップは、毎年全日本樽みこし綱引き選手権大会に参加しているような強豪チーム向けの部門である。「チャレンジシップには、栃尾の外から学生ボランティア団体の「特定非営利活動法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）」が組織的に参加しており、その学生たちが複数のチームを編成して競技に参加した。（IVUSAは、中越大地震で大きな被害があった栃尾地域の仮設住宅の支援を行った縁で、その後も栃尾との交流を続けている。）

（注 p.21）

チャレンジシップは、「IVUSA」のチームが複数参加していることもあり、盛り上がりを見せていた。チャンピオンシップも、長年参加し続けている人ばかりが参加している為、迫力がある対戦を見ることが出来た。

今瀬ゼミは、全日本樽みこし綱引き選手権大会の事前に行われる「部会」に参加させて頂いた際に、「チャレンジシップへ参加しませんか」と声をかけて頂いたため、出場を決めた。練習を全くしていなかったが、チャンピオンシップの参加者の方からコツや注意する点を教えていただき、準優勝することができた。「全日本樽みこし綱引き選手権大会」は、酒樽をのせたみこしを綱引きし、自分たちの方に引っ張れば勝ちという、シンプルなものながら、実際にやってみると、面白い競技であった。

翌2015年度第61回のとちお祭の全日本樽みこし綱引き選手権大会にも参加させて頂き、このときも準優勝を勝ち取ることができた。第61回では、以前に少年少女の部に参加していた中学生チームがチャレンジシップに参加し、また会場をより良い場所へ変更するなどして、第60回時とは異なった工夫がなされ、より盛り上がりを見せていた。

②とちお祭2日目の表方活動②

～仁和賀行進～

当日の「仁和賀行進」の様子を報告する前に、今瀬ゼミが仁和賀行進に参加することになった経緯について述べておく。

仁和賀行進に参加する団体の一つである「栃尾本町区」（自治会）は、参加団体の中でも、驚くほどに賑やかな団体である。仁和賀行進では、参加団体それぞれの特色をあらわした衣装を用意し、パフォーマンスを披露するわけだが、栃尾本町区では、本番に使用する衣装を手作りしている。第60回のとちお祭では、祝60周年ということで、過去の衣装などを再び使用したパフォーマンスを企画し、披露するということがあった。

今瀬ゼミでは、7月28日、8月20日に栃尾本町区に取材・調査に訪問した。栃尾本町区が仁和賀行進の準備を進める場所は、地区内にある諏訪神社の境内である。取材の初日は、過去に使用した衣装が再び使える状況なのかどうか、衣装ケースから取り出し、実際に着てみるの確認や、本番に使用する小道具の一つであるポンポンを作る作業を行った。今瀬ゼミでは取材・調査を行いながらその作業の手伝いも行った。

栃尾本町区の方々にお話しを伺っていたところ、「本町の仁和賀行進に参加してみないか。」と声をかけていただき、本番では、一部の踊りを一緒にやらせていただくことになった。

また、今瀬ゼミの長岡大学学園祭「悠久祭」において、栃尾本町区の仁和賀行進を「出前開催」していただくことも決まった（詳細は後述）。

8月20日の取材・調査では、仁和賀行進に使うトラックを、栃尾本町区の男性陣が装飾している最中であった。諏訪神社近くにあるスタジオでは、とちお祭本番に近いということもあり、パフォーマンスの練習を行っていた。スタジオには、小さい子供から、大人までかなりの人数が集まっており、にぎやかであった。パフォーマンスの内容は、完成形に近いもので、細かな注意点などを確認しあっている段階のようであった。

第60回とちお祭の仁和賀行進では、各参加団体が中心市街地の予め決められた場所から何度か踊りながら行進をして、メインとなる演技会場（秋葉トンネル前）に向かい、最後にその演技会場で各参加団体が順番に演技を披露して踊りを競い合った。（注 p.22）

天候に恵まれず、途中で雨が降り出してきてしまったが、観客席に急遽テントを設置するなどして、対応を行

った。雨が降る中でも仁和賀行進は続けられ、多くの観客が観覧していた。今瀬ゼミは7月28日の取材の際に、栃尾本町区の方に声をかけて頂いていたため、簡単な振り付けを覚えて、一緒に踊らせていただいた。栃尾本町区がパフォーマンスをする際にも、雨はやむことなく降り続けていたが、無事、発表・披露することが出来た。とちお祭の「裏方」だけでなく、一般的な目線である「表方」に参加することで、とちお祭がどういったものなのか、より理解を深めることが出来た。

(4)祭の「協働」によるPR活動と調査

①大学学園祭での祭の「出前開催」

長岡大学の学園祭「悠久祭」が2014年10月25日・26日に開催された。その1日目、今瀬ゼミでは、とちお祭のイベントである「仁和賀行進」を学園祭で「出前開催」した。栃尾本町区の住民の方々(約25名)が長岡大学にお越し下さって、今瀬ゼミのゼミ生やボランティア学生たちと一緒に「栃尾本町仁和賀隊パフォーマンス」を協働で披露した。(注 p.26)

とちお祭とは違い、学園祭で行ったため、学生のお客さんが多い中での発表であった。踊り手の人数はとちお祭で行った時よりは少なかったものの、衣装はとちお祭で用いたものと同様のものを着用した。かなりのお客さんが足を止めて見てくださっていた。仁和賀行進は本来、とちお祭でしか見ることが出来ないものであるため、祭りをPRする意味では成功と言えるであろう。

②「長岡市内巡回パネル展」の開催

今瀬ゼミでは、長岡大学の学園祭(2014年10月25日・26日)において、「とちお祭への裏方参画と調査・情報発信」事業における活動報告を20枚のパネル(A1サイズ)に表現し、1つの教室を用いてパネル展示会を開催した。このパネル展では、今瀬ゼミで独自に作成したパネルに加えて、NPO法人フォーラム栃尾熱都の佐藤昭氏からお借りした「とちお祭の歴史パネル」も同時に展示させて頂いた。(注 p.29)

学園祭での「栃尾本町仁和賀隊パフォーマンス」の様子も後日1枚のパネル(A1サイズ)にした。

そして、パネル展は学園祭だけにとどまらず、今瀬ゼミは長岡市役所(栃尾支所商工観光課、市民協働推進室)、栃尾観光協会との「協働」事業として、12月以降、それらパネルを使って、長岡市内各所において巡回でパネル展示会「とちお祭への裏方参画と調査・情報発信」を開催した。2014年12月25日～2015年1月28日には「長

岡市栃尾産業交流センターおりなす」(道の駅ルート290とちおに隣接)、翌2月2日～13日には「シティホールプラザアオーレ長岡」(長岡市役所本庁舎)で開催した。(注 p.29)

これらの展示を通し、より多くの人々にとちお祭の「裏方」さんがどういったことをしているのか知っていただくことができた。必要があれば今後もこういったパネル展を行い、裏方活動に興味を持っていただけるようにしていきたい。

【引用文献】(文中に(注)と表記)

今瀬政司ゼミナール(2015年3月)『平成26年度 学生による地域活性化プログラム 今瀬政司ゼミナール活動報告書「とちお祭への裏方参画と調査・情報発信」』長岡大学地域活性化プログラム推進室(ゼミ生:五十嵐信彦、澤井芳秀、須田一聖、相山祐輝、太刀川健太郎(当時3年生、五十音順))

<http://www.nagaokauniv.ac.jp/wp2014/wp-content/uploads/2015/05/2015-02imase.pdf>

【参考文献】

今瀬政司(2015年7月)「実践的教育・研究「今瀬ゼミ:とちお祭への裏方参画と調査・情報発信」一地域を支える「裏方」と必要性からの「協働」一」長岡大学『研究論叢』第13号

http://www.nagaokauniv.ac.jp/wp2014/wp-content/uploads/2011/12/P45_imase.pdf

今瀬政司研究室ホームページ

<http://sicnpo.jp/imase-nagaokauniv/>